

称号及び氏名 博士（言語文化学） 五十嵐 小優粒

学位授与の日付 2020年3月31日

論文名 ペルシア語におけるヴォイスの諸相
—他言語との比較を通して—

論文審査委員 主査 山東 功

副査 西尾 純二

副査 奥村 和子

副査 野田 恵剛（中部大学大学院国際人間学研究科教授）

学位論文の内容の要旨

本研究は、現代ペルシア語におけるヴォイスを考察対象とし、その諸相を記述することを目的としている。ペルシア語の *šodan* という自動詞は、それだけで「～になる」という状態変化の意味役割を担うばかりでなく、補助動詞として受身文や可能文も生成される。また、その受身文や可能文の中には、*šodan* 以外のマーカーを用いた形式の構文が多数あるものの、これまでそれらを一括にまとめた論考がないこともあり、本稿にて先行研究におけるペルシア語のヴォイスの様相を総括して記述することを目指した。それに加えて、ペルシア語の書き言葉による資料も用いて、これまでなされてこなかった受身表現の出現様相についても実証的に示している。ヴォイスの各表現についても、実例に基づいて形式的・意味的に検証し、先行研究においてまだ記述されていない見解についても各章で提言している。

まず第 1 章では、ペルシア語受身が現在の様相を帯びるまでに経てきた歴史的変遷をはじめ、先行研究における記述を通して、受身がどのように捉えられているかについて提示する。その上で、本研究における受身の捉え方についても示した。

受身の存在自体を否定する先行研究もある中で、現代ペルシア語において受身表現は非常に豊かなバリエーションを有して現われる。それらと、一部日本語の受身と比較することで、間接受身や使役受身といった、これまでペルシア語文法では着目されていなかった形式での表現も可能であることが分かった。

第 2 章では、これまで使用頻度が非常に少ないとされてきたペルシア語の受身について、少なくとも日本語と同程度の出現が見られることを書き言葉の資料を用いて実証的に提示した。ここでは 2 種類の調査を行っており、1 つ目は、小説文と条約文という文体が異なる書き言葉データを用いて、日本語・英語・フランス語と受身の出現数を比較することでペルシア語受身の出現様相をより顕著に明らかにできた。またペルシア語受身の中で、他動詞の過去分詞 + *šodan* から成るものと、そうではないいわゆる周辺的な受身の使用数にも着目し、汎用性の高い周辺的受身が Vt-PP + *šodan* 受身の使用を抑えていることを突きとめた。

2 つ目の調査では、受身の出現様相の中で非情物受身と有情物受身の分布に着目し、文学作品を用いて、日本語とペルシア語を比較している。その調査結果として、ペルシア語において非情物主語受身の使用が有情物主語の受身のそれより約 4 倍ある事が分かり、これまで指摘されてこなかったペルシア語受身の特徴が判明した。

第 3 章では、主に日本語との対照分析を通して、両言語の自動詞・他動詞と受身の関係を考察している。自動詞と他動詞に関する日本語とペルシア語間の相違点は、それぞれの動詞がとる格と、非情物主語の他動詞に対する許容度、そして同一の事象に

対して、自動詞と他動詞のいずれを取るかという選択基準にあることが分かった。さらに、受身文に関連する事柄として、両言語ともに受身形（他動詞の過去分詞+šodanの形式）を作ることができる他動詞の中でも、ペルシア語の方が格段に受身形になれる動詞の割合が少ないことが判明した。本稿ではこのことについて、Tsunoda (1985: 101) で提案されている「二項述語の階層」の、意味による動詞の分類を参照し、具体例を挙げながら両言語の動詞で受身文になれるものと、なれない、またはなりにくいものについて、その境界を提示した。日本語では、既に先行研究において、「関係」や「能力」を表す動詞が受身文にならない、またはなりにくいものとして指摘されているが、ペルシア語では、その2分類に加えて、「追求」「知識」「感情」を表す動詞も受身文にならない、またはなりにくいことを示した。

また後半では、ペルシア語で受身を構成する動詞の過去分詞と、それと同形の形容詞も加え、さらに、他動詞をペアの自動詞を持つ有対他動詞とペアの自動詞を持たない無対他動詞に分けて分析を行なった。その結論として、受身が無対他動詞の欠損している自動詞を補う役割を持っており、その点で受身がペルシア語の中で、その有無を議論される段階を超えて、必要不可欠な要素であることを主張した。

第4章では、受身の構成要素のうち動作主のマーカースを取り上げて考察している。用法が多岐にわたる *az* をはじめ、その他の動作主マーカースについても先行研究の記述と見解を織り交ぜながら、その特徴を示した。ペルシア語受身の動作主マーカースについて特筆すべきことは、日本語の「～によって」のようなマーカースと異なり、まだ完全に文法化しておらず、名詞の意味を多分に残している点である。使用する動作主マーカースによって全体の文意に影響を与えることから、マーカースの使用制限が生じていることを示した。

最終章である5章では、可能表現を考察対象としている。これまでペルシア語の文法研究において補助動詞の域を出なかった *tavānestan*（～できる）と *šodan* を用いた可能文について、その相違点や使い分けについて分析した。ペルシア語母語話者の協力を得て、*tavānestan* と *šodan* が入れ替わっても使用可能かどうかを検証した結果、両者の棲み分けとして判明したことを提示した。まず、*tavānestan* が能力可能と状況可能を、*šodan* が状況可能を表し、*šodan* が少なくとも書き言葉では能力可能の意味で用いられないことを示した。ただし、能力可能であっても、「一般的にこのように言える」という普遍的なケースの場合は *šodan* が用いられ、*tavānestan* は使用不可能になることも判明した。また、*tavānestan* と *šodan* の意味上の棲み分けの他に、意志性の弱い本動詞との共起制限があることや、*tavānestan* を動作主の前に置くか後に置くかという統語的な制約などが存在することも明らかにした。

5章の締め括りとして、両者の非人称構文にも言及してその違いを述べた他、*tavānestan* と *šodan* 以外の可能表現についても取り上げ、その特徴を記述した。

学位論文審査結果の要旨

学位論文提出者氏名 五十嵐 小優粒
学位論文題目 ペルシア語におけるヴォイスの諸相
—他言語との比較を通して—

本学位論文審査委員会は、人間社会学研究科言語文化学専攻の博士論文審査基準に照らして厳正な審査を行い、以下の評価と結論に至った。

1) 研究テーマが絞り込まれている。

本論は、ペルシア語の自動詞 *šodan* が、それだけで「～になる」という状態変化の意味役割を担うばかりでなく、補助動詞として用いられる場合には、受身や可能の意味をもつ文を生成するという点に注目し、従来のペルシア語文法研究における受身の存在否定論に対し、積極的に受身の存在を認定したものである。このことにより、文法研究の射程を広げたという点では、大いに評価すべきものであり、その内容はペルシア語における受身を中心とする、ヴォイスの問題に焦点化されている。

2) 論文の方法論が明確である。

本論は、ペルシア語のコーパスを基に、受身文の使用頻度を調査しており、出現頻度が必ずしも従来主張されていたほど低くないことを示している。その調査手法は明確であり、研究方法論としての適切さを示している。また、ペルシア語と英語・フランス語の翻訳との比較を通して、ジャンル別によるペルシア語の受身文や受動類似表現（意味的受動表現）の頻度を考察している点は、同一資料の多言語翻訳におけるヴォイス的な文脈に関して、典型的なヴォイスの諸形式の出現傾向を見るという、対照研究の方法論的考察として、極めて有益な示唆を与えるものである。

3) 先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。

本論では、ペルシア語学の先行研究における受身の扱われ方を精緻に検討した上で、受身の存在否定に関する議論や、その批判を十分にふまえ、ペルシア語におけるヴォイスの問題を取り上げており、先行研究の精査と言語学的検討との結果が、十分に関連付けられている。また、ペルシア語における受身の表現が、現在の様相を帯びるまでに至る歴史的変遷を明らかにするとともに、現代ペルシア語の受身表現が、実際には非常に豊かなバリエーションを有していることを実証している。

4) 結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。

本論では、ペルシア語における受身の表現の存在を論証する上で不可欠な、ペルシア語の書き言葉に対する精緻なデータ収集と考察がなされている。特に、小説や条約文などを精査した上で、ペルシア語・日本語・フランス語の書き言葉コーパスといった資料をもとに、受身表現の出現傾向や実態について、緻密な実証と十分な検討がなされており、行論上の展開も極めて論理的である。また、自動詞・他動詞と受身との関係について「他動性」の観点から考察し、日本語とペルシア語の他動詞の比較において、ペルシア語の方が受身になれる動詞が少ないことを指摘している点は、大変説得力に富むものとなっている。

5) 当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。

本論は、行為者を表す表現の文法化の度合いに注目し、受身文において文法化が完了していない表現について考察をしており、具体的な例として、「手」を使った表現が「悪口を言う」など「口」を使った表現には使えないといった、使用制限があることを挙げている。また、受身表現に関連するものとして、可能表現に関して、補助動詞 *tavānestan* と *šodan* における「できる」の意味使用範囲を認定し、その上で、*tavānestan* については能力可能と状況可能の両方を表現することができ、一方で *šodan* は状況可能に限られることを述べている。これらについては、ペルシア語法記述の面から見て極めて有益で、高く評価されるべきものであり、その所論は先駆的なものと位置付けられる。さらに、受身に関する議論に対して、これまでのペルシア語文法ではあまり着目されていなかった、間接受身や使役受身の表現についても考察を行い、それらの表現が可能であることを、日本語の受身と比較することにより明らかにした点は、従来の研究では見られなかったことから、極めて独創的なものであると評価できる。

なお、本論については、ペルシア語と日本語、フランス語との対照研究に対する積極的な意義付けや、形態論的観点と意味論的観点に関する厳格な峻別が、より一層望まれると指摘することもできようが、これは、日本における数少ないペルシア語文法の記述的研究という特性に対する、いわば望蜀の念とも言うべきものであり、本論の価値を毀損するものではない。

以上の評価を踏まえ、本学位論文審査委員会は全員一致の結果、本論文を博士（言語文化学）の学位に値するものと判断した。